

「被害甚大。それ以上は不明」

十七日未明、激震は阪神一帯を襲い、多くの市民が被災したにもかかわらず、消防にも、警察にも被害の情報は遅々として入らない。

各役所による懸命の人命救助活動と情報収集が始まっていたが、把握できるのは、目の前の惨状だけという状況の中で苦しんでいた。兵庫県の中核部も同じだった。

神戸市中央区の県庁一号館地下一階。

保安室にいた管財課保安員、鳴村宏至(三)は激しい揺れに、ロッカーにしがみついた。停電で真っ暗になった保安室隣の警報盤の赤ランプが一斉に点灯。「火災発生」の庁内放送が無人の庁舎に響きわたった。だが、火の手はない。

六時四十五分、防災業務の第一線の責任者である消防交通安全課防災係長、野口一行(四)が二号館に入ってきた。庁舎西十五キロの西区狩場台の自宅からマイカーを飛ばした。

庁舎は割れた二千枚のガラスの海に浮かんでいた。そのまま階段を駆け上った。十二階の同課にたどりついたが、ドアが開かない。室内で電話がけたたましく鳴っている。「早く中へ」。何度か体当たりし、破れた壁のすき間からくぐって入った。

書類が散乱、テレビ、ラジオも落下。室内九回線十二台の電話機が一斉に鳴

る。書類に埋もれた電話に飛びつき、警察からの連絡と思っていると、市民からの問い合わせばかり。交換業務が停止していたため、直通電話が防災係に殺到したのだ。

副知事の芦尾長司(六)が六時五十分、東灘区岡本の自宅から登庁、同課へ来たが、野口は「災对本部が必要です」と伝えるだけで、また電話を取った。

七時前、県警からの一報。だが、「被害甚大。それ以上は不明」。これでは情報にもならない。安否を尋ねる電話ばかりが鳴る。

野口は防災無線で知事と消防庁に状況を伝えなければならぬ。が、防災のキーマンは電話番に追われていた。

兵庫県は、最新鋭の衛星通信装置を備えていた。災害時の緊急通信手段として活用する「兵庫衛星通信ネットワーク」。九一年十二月に八十二億円を投じた防災行政無線だ。

通信衛星「スーパードB」を使って県内の九十一市町のほか、消防本部、第五管区海上保安本部など計百七十二局を結んでいる。

災害時には、電話が切れても被害状況を国土庁と消防庁、二十道県に速報できるシステムだが、地震に痛撃された。

地震発生と同時に停電となり、非常用発電装置が作動したものの、やがてダウ

ン。庁舎屋上にある発電装置の冷却水槽が引っくり返り、長さ四十メートルの送水パイプも切断され、衛星通信は機能しなかった。

もう一つ悪条件が重なった。このシステム運用の専門家、情報管理課の衛星通信係四人は、家族が家具の下敷きになるなどして、登庁できなかった。

知事の貝原俊民

(六)が、職員の運

転する軽乗用車で登庁したのは八時二十分。すぐに五階庁議室で第一回防災対策会議を開いたが、二十一人のメンバー

中、出席したのは、貝原、芦尾、都市住宅部長の柴田高博

(五)、総務部長の梶田信一郎(四七)、

商工部長の豊倉進

(五)の五人だけ。

会議に呼び出された野口は「阪神間に被害が集中している模様です。それ以上

のデータは把握していません」と報告した。西宮は、芦屋は……。公式情報は一件もなかった。貝原は、黙り込んだ。

情報にもならない情報でも、それらの断片が広域通信網を使って現場や東京に控えるプロの分析官に届けられ、的確な判断がされていたら、その後の救援活動は違ったものになっていたかも知れない。



旧ハンター邸

1889年ごろ、北野町に建築、1964年に王子公園内に移された。重要文化財。ガラス戸の菱格子が特徴(神戸市灘区、1月24日撮影)